

## 第19話 第1次世界大戦とわが国

欧州おうしゅうに起こった大戦争に、我が国は日英同盟の好よしみ おもを重んじて参戦する。  
青島ちんたおの攻略。南洋諸島の占領。更に進んでインド洋、地中海にも出動する。  
こうして、講和会議には五大国の一つとして参与する。ヴェルサイユ条約の  
締結こくさいれんめい そうせつ。国際聯盟の創設。

### ヨーロッパの戦乱

大正3年（西暦1914年）7月、ヨーロッパに戦乱せんらんが起こって、ドイツ、オーストリア・ハンガリーの同盟国は、セルビア、ロシア、フランス、ベルギー、イギリスの連合国と戦いを開いた。後には我が日本もはじめ、イタリア、アメリカ合衆国、ルーマニアなどの10余ヶ国が連合国のほうに加わり、トルコとブルガリアの2ヶ国が同盟国のほうに加わって、ついに5年目の大正7年には、中立国として参加しないのは世界にただ14ヶ国しか無かったというほどの、世界の歴史にかつてない大戦争となった。

### 原因

そもそも、この戦乱の原因せんらん げんいんとなったのは、その前月の6月28日、オーストリア・ハンガリーの皇太子フェルディナンド大公たいこう こうひと公妃しゆふとが、ボスニア州の首府サラエボというところで、セルビアの青年に暗殺された事なのですが、しかし、それが、こうまで拡大して、名実共に世界の大戦争になるに至ったのは、列国の間にそれぞれ深い、複雑な事情が伏在していたからで、今、それを詳しく明らかにするのは中々容易でないので、ここにはただ我が国のこの大戦かんけい てんに関係した点だけをお話する。

### 対独宣戦

すでに皆さんも知っているように、わが国は東亜およびインドにおける全局の平和を確保するためにイギリスと攻守同盟を結んでいる。しかし、この大戦のはじめにドイツは、東洋における根拠地である膠州湾で日夜戦備を修め、その艦艇はしきりに東亜の海洋に出没して、英国の商船を脅かし、すこぶる東亜の平和を危うくした。

そこで、我が国は、日英同盟の好よしみ おもを重んじて、英国が援助を求めて来たのに応じた。8月15日にドイツに最後の通牒を送り、日本および中国方面からドイツの艦艇を退去させよ。そうでなければ、武装を解除する事と、膠州湾租借地を中国に還付する目的でひと先づ我が国に無償、無条件で引き渡す事を要求した。

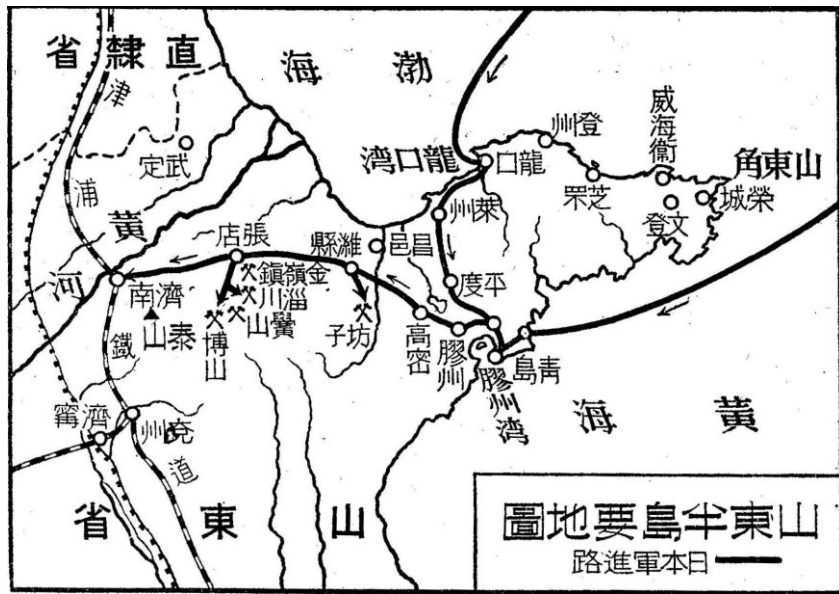
しかし、ドイツは、この日本の態度に憤慨して、何らの回答もしなかったので、彼我の国交はここに断絶して、大正天皇は8月23日、ついにドイツに宣戦の大詔を発せられた。

### 青島攻撃

それで、青島攻撃の命を受けた海軍中将加藤定吉は、第二艦隊を率いて直ちに出動し、8月27日には進んで膠州湾租借地の全沿岸を封鎖した。又、陸軍中将神尾光臣の率いる久留米の第十八師団は、

第19話 第一次世界大戦と我が国

その先発部隊が、9月2日、山東半島の龍口湾に上陸して、その12日に即墨を占領し、17日に膠州湾  
停車場を占領した。こうして、青島の要塞地帯と外部との連絡を先づ絶ったのです。



ついで陸軍の後続部隊は、9月18日に即墨の東方に当たる勞山湾に上陸して王哥庄を占領して、龍口上陸軍と連絡を取って次第に背面から軍を進めた。

この時、わが陸海軍の飛行隊は初めて実戦に参加したが、21日から活動を開始して、敵情の偵察に、或いは爆弾の投下に、大いに作戦に便宜を与え、共に、すこぶる敵の心胆を寒くさせた。

ついで23日、英国の陸軍少将バーナジストンは、天津にあった英国兵およびインド兵を率いて勞山湾付近に上陸して、わが青島攻囲軍に参加した。

独軍の降伏

こうして、わが攻囲軍は次第に敵を圧迫して、9月28日には、敵が天嶮を恃んで第二防禦線としていた孤山から巫山にわたる一帯の高地を占領し、いよいよ要塞に迫って行った。この時、天皇の思し召しを敵に伝えて、非戦闘員および中立国民に兵火の惨害を免れさせるために、10月13日、先づこれを救い出して後に、10月31日から海軍と力を協せて総攻撃を開始した。

これから連日、前進、猛撃、11月6日からは突撃戦に移って、敵の諸砲台に肉薄し、翌7日の早朝には、さしも堅固を誇っていたモルトケ、イルチス、ビスマルク以下の砲台、保塁を悉く占領したので、敵の司令官海軍大佐ワルデックも、今は如何ともせん方なく、ついに白旗を掲げて降った。

それで、膠州湾は全く我が有に帰した。

南洋諸島の占領

ところが、ドイツの東洋艦隊の主力は、我が第二艦隊が膠州湾を封鎖する以前に、すでに南洋方面に出動して、しきりに英国船を襲ったり、わが商船を脅かしたりしていた。それで、我が第一艦隊司令長官海軍中将加藤友三郎は、その部隊の編成を



マーシャル諸島の民家

改めて、第一、第二の南遣支隊(注:支は支那・中国を指す)を南洋方面に派遣して、東洋艦隊主力を搜索

させると共に、太平洋にあるドイツ領のマーシャル、マリヤナ、カロリン諸島を占領して敵艦の根拠地を奪った。

10月上旬から中旬にかけて、わが艦隊はこれらの赤道以北の諸島を占領したが、このころ、赤道以南のドイツ領の諸島は、イギリスの豪州（オーストラリア）艦隊およびニュージーランド艦隊がこれを占領した。

### ドイツ東洋艦隊の全滅

こうして後、わが艦隊の一部はインドに向かい、一部は東太平洋に出て、イギリス海軍と共にしきりに敵を圧迫した。敵艦中で、最も変幻出没、約2ヶ月の間に、連合国方の船艦19隻を撃沈破壊し、一時はインド洋方面の貿易を杜絶させたほどにも猛威をふるった軽巡洋艦エムデンも、11月9日にはインド洋のココス群島の珊瑚礁上に擱座（座礁）して、ついに白旗を掲げた。

その余りの主力艦は、11月3日、南米チリのコロンネル沖でイギリスの一戦隊と戦って、このイギリスの戦隊に殆ど全滅に近い大損害を与えた後に、マゼラン海峡を通過して大西洋に出て、12月8日、英領フォークランド島付近に至ったところで、優勢な英国艦隊に遊撃されて全滅した。思うに、かれらは、太平洋に根拠地を全く失ったので、遠く南アメリカを迂回し、大西洋を突破して本国に帰ろうとしたのでしよう。ともかくここで、東洋におけるドイツの勢力は根こそぎくつがえされてしまったのです。

尋で日英の間に協定が出来て、我が国は赤道以北の旧ドイツ領の三群島の軍制を布くことになり、爾来、わが海軍は太平洋およびインド洋の警備に任じて完全にその平和を保った。

ところが、青島の陥落後、中国政府は山東の撤兵その他についてしばしば我れに抗議していたが、やがてその年も暮れて、大正4年1月7日になると、突如として、正式に交戦区域の撤廃を声明して、即時撤兵を我れに要求して来た。

これより先き、明治44年10月、清国に革命の乱が起こって、翌45年2月、宣統帝は皇帝の尊号と年金とを得て退位させられたので、ここに清国は世祖以来268年で亡び、新たに共和国の中華民国が起こって、その第一回の大総統には袁世凱が選ばれて就任していたのです。

### 日支交渉

それで、我が政府は、上の要求を受けると、却って彼れの暴状を責めて、その要求のために何らの行動の自由を束縛されないことを通告した。そして、おりからロシアが外蒙古の独立を援けてこれをその勢力化に置き、また、イギリスがチベットの独立を援けてその新国家にイギリスの優越権を求めているのに対応して、われもまたこの際に、山東省の処分問題と共に、久しく解決されずに来ている他の諸問題をも一気に解決しようと、大正4年1月18日に、21か条にわたる提案を大総統袁世凱に宛てて提出した。

両国の委員は慎重に商議を始めて、交渉25回、約4ヶ月後の5月25日に至って、互いにその条約に調印した。そのうちの重要な箇条は、

- (1) 山東省におけるドイツの利権を我が国が継承すること。

## 第19話 第一次世界大戦と我が国

- (2) 旅順と大連の租借期限ならびに南満州鉄道および安奉鉄道に関する期限をいずれも99カ年に延長すること。
- (3) 南満州および東部内蒙古におけるわが国の優越権を認める。
- (4) 我が国は他日膠州湾を中国に還付することを表明し、中国は山東省のどこをも他国に割譲したり租借させたりしないことを中国は約す。

### 石井 ランシング協定

ところが、この日支条約（訳注：当時は、中国のことを支那、チャイナ、China と呼んでいた）の成立に憤激して、中国各地に日貨排斥の事などが起こった。又、列国、ことにアメリカ合衆国は、欧米諸国が世界大戦のために忙しく、東洋方面を顧みる暇のないのに乗じて、日本が独り中国を苦しめて、日頃の領土的、経済的野心を満足させていると考えた。それで、わが国はその誤解を解く必要を感じて、大正6年6月に子爵石井菊次郎を特派大使としてアメリカ合衆国に派遣し、交渉数ヶ月、12月2日に至って、外交文書を交換して紳士協約を結んだ。世に石井ランシング協定というのがこれです。それによって、合衆国はわが国が中国、殊に我が国に接続する地域において特殊の権益を有することを認めると共に、日米両国は中国の独立を保全し、同国内における門戸開放および商工業の機会均等主義を支持することを互いに宣言したのです。

### 日露の新協約

これより先き、わが国は参戦後に宣言して連合国を援けることにしたが、わけても露国に対しては、極東の守備を撤して、露国に安心して西方での交戦に従事させたのみならず、進んで銃砲、弾薬および軍需品を供給した。それで、露国は益々深く我れを信頼して、大正5年7月には更に両国の間に新協約ができ、互いにその承認した領土権および特殊利益の擁護、防衛のために相協定すべきことを約した。これによって極東の平和の保障はいよいよ確実にされた。

### ドイツの潜航艇戦略

ところで、一方、ドイツは開戦以来、陸に海に実によく奮闘したが、海軍はさすがに英国に及ばなかったもので、正面から堂々と戦うことはせずに、ひそかに潜航艇を英仏の近海および地中海にまわして、しきりに連合国の商船を無警告で撃沈したりした。わが国の商船も幾隻か地中海で撃沈された。いかに戦時とはいえ、無防備の商船を、何らの警告も与えずに撃沈するのは、明らかに不法な、非道な振舞いです。

ドイツの凶暴を憎まないものはなかったが、それでもなおドイツは連合国、殊にイギリスを苦しめようという所期の目的を達することができないのを見ると、ついに大正6年2月、イギリス、フランス、イタリアの3国の海岸を距ること20海里以内（注：1海里は1.852 km）に入った船舶は、それがどこの国のものであるかを問わず、ことごとく無警告で攻撃を加えるという宣言をした。つまり、中立国の船舶が敵国側に食料その他を供給するのを妨げようとしたのです。

わが海軍の地中海進出

そこで、地中海方面はますます不安になって来たので、わが海軍は更に遠くこの方面にも出動して、イギリスの地中海艦隊の一部と共に、英領マルタ島を根拠地として警戒、護衛に当たり、すこぶる勇敢に敵の暴行をおさえた。

しかも、ドイツのこの無法な無制限潜航艇戦は、これまで隠忍自重して、よく中立を守っていたアメリカ合衆国をもついに大いに憤らせて、いよいよ立って連合国側に参加させることになったために、これより独仏国境のほうの西部戦線は、漸く連合軍が優勢となった。

ところが、一方、露独国境のほうの東部戦線には、はからずも一大異変が突発した。それは外でもない、ロシアが開戦のはじめに、英、仏、露、日、の5国間に調印した単独不講和の宣言に背いて、独りで勝手にドイツと講和条約を結んだことです。

しかし、それにはまた別に仔細がありました。

露国の革命

そもそも露軍は開戦のはじめこそ一時優勢に見えたのですが、その後、しだいにドイツ軍に圧迫され、敗戦に敗戦を重ねた。やがて食料の不足と燃料の欠乏とのために飢餓と寒気とに迫られて来た国民は、しきりに政府の無能を叫んで、各地に暴動を起し、軍隊の一部がこれに加わってしまい、ついに久しく発生しそうで発生せずにはいた革命にまで発展した。こうして大正6年(西暦1917年)3月15日、皇帝ニコライ2世を廃して、多年にわたり専制の暴政を布いていたロマノフ王朝を滅ぼし、新たに共和政府を建てたのです。

露独の単独講和

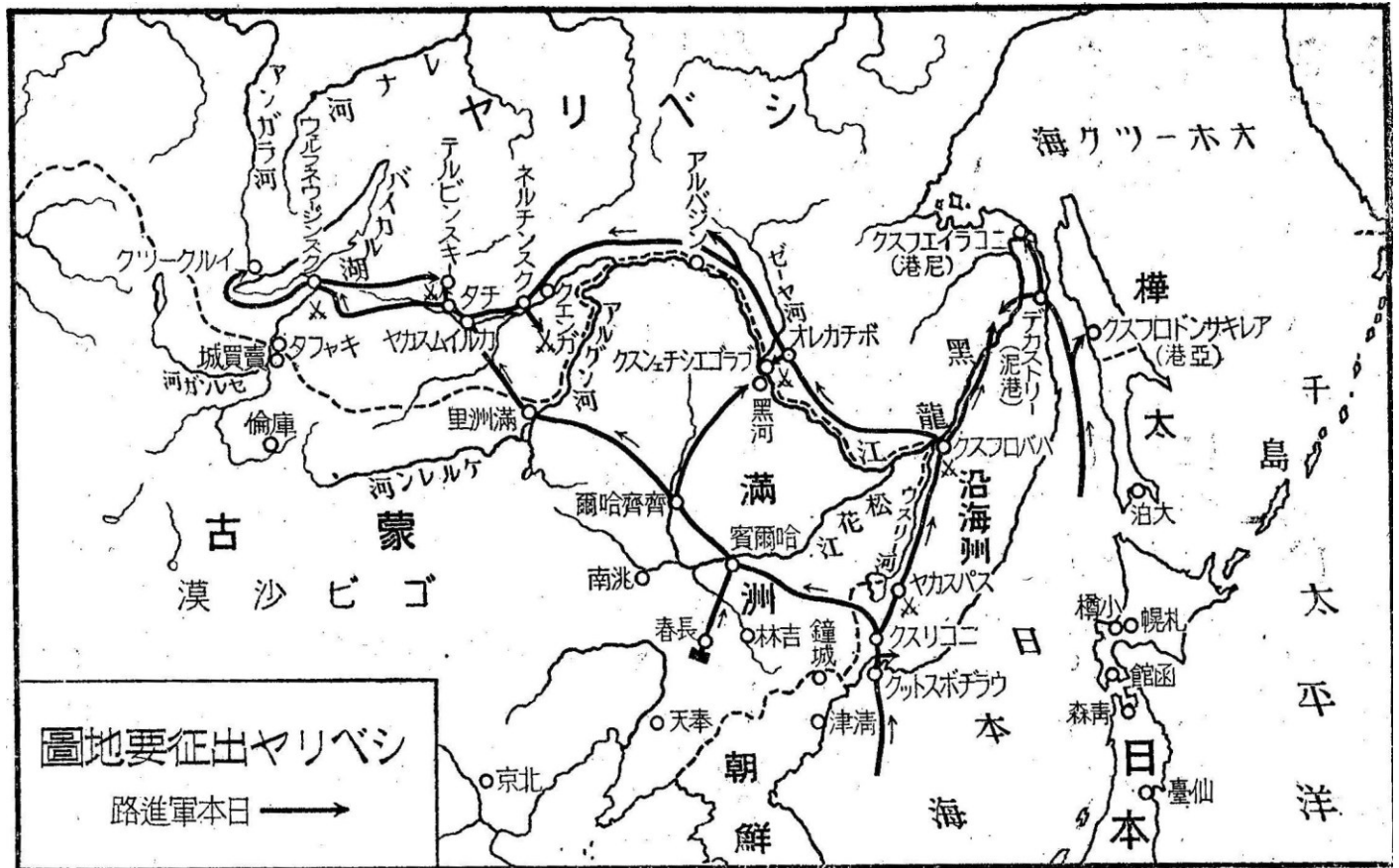
尤も、この時に新政府の中心となった首謀者のケレンスキーは、必ずしも連合国を裏切るつもりもなかったが、更にその11月9日に第二革命が起こり、無抵抗主義講和を主張する過激派のレーニン、トロッキーが政権を握るに及んで、直ちにドイツと休戦条約を結び、その年末から講和談判をはじめ、翌大正7年(西暦1918年)3月3日について単独にドイツと講和条約を結んだのです。

ところが、この単独講和の結果、これまでロシア軍と共になって独逸軍と戦っていたチェック・スロバック軍に東進運動というものが起こって、ついにわが国がこれを援けるためにシベリアに出兵しなければならない事になったのです。この仔細は以下です。

チェック・スロバック軍の東進運動

元来、チェック・スロバックの両民族はロシアと同族のスラブ人ですが、オーストリア・ハンガリーのボヘミア地方の住民でしたので、戦争が始まると、オーストリアに徴集されて、ロシアに向ったのです。けれども、かれらは同族のロシアと戦うことは好まなかったし、又、一つはロシアの援けを借りて独立しようとも思っていたので、わざとロシアに降って別に軍団を組織して、却って露軍と共に独逸(ドイツ、オーストリア)軍と戦っていたのです。

ところが、今度、ロシアがドイツと講和をしたために、かれらは忽ちその立場を失った。ロシアに留まる事も出来ないし、といて、欺いたオーストリアにも帰ることも出来ないのです。そこで、シベリアを横断してウラジオストックに出て、そこから船でアメリカに渡って、更に大西洋を越え、西部戦線の連合軍に合しようと志した。そして万難を排してシベリアを東に進んで来たが、そこは開放された独逸の俘虜が過激派軍と共に方々に屯して、かれらの東進をしきりに妨げたのです。



わが国のシベリア出兵

そこで、かれらは援助を連合軍に求めて来たので、わが国は米国の提議に応じて、列国と共に出兵することになり、大正17年8月3日、陸軍大将 大谷喜久蔵を連合軍総司令官に任じ、第十二師団の兵を率いてウラジオストックに上陸させた。この時、イギリス、アメリカ合衆国、フランスの諸国もまた出兵したが、連合軍の主力はわが日本軍でしたので、他の諸国兵には主としてウラジオストック付近の守備に当たさせた。そして、わが軍はしだいに過激派軍を駆逐しながら、道を分けて進み、一軍はハバロフスクを占領し、ブラゴベシチェンスクを取ってゼーヤに入り、一軍はチタを陥れてイルクーツクに迫って行った。こうしてチェク・スロバク軍の進出を支援すると共に、シベリアの秩序の回復につとめて、大いに連合軍のためにつくしたのです。(注：これをシベリア出兵と呼びます)

独逸軍の敗退

さて、一方ドイツは、東方の大敵ロシアと講和して後、その全力を西部戦線にあつめて最後の突撃を試みたが、大正7年の3月、4月、5月とつづけて勝利を占めたにもかかわらず、1918年7月にアメリカの軍隊約百万がフランスの戦線に到着したところから形勢が一変した。まづその月におけるマルヌ河の

第二次大激戦で、ドイツ軍が利を失ってからは、全戦にわたって連合軍に急迫されて、やがて忽ちに  
してフランス、ベルギーの国境内にはドイツ兵の片影をも認めないようになった。

## 休戦

のみならず、連合軍の勝利は西南アジアにおいても、バルカン半島においても、すべて全く徹底的で  
したので、同年10月1日、先づブルガリアが連合軍に和を請い、ついで同月31日、トルコがイギリスと休戦  
条約を結んだ。さらに、オーストリア・ハンガリーは内部から各異人種が独立運動を起こして殆ど全  
く解体しかけたので、これもまた11月4日をもってイタリアと休戦条約を結んだ。さすがのドイツも今  
はいかんとも詮方なく、ついに屈して休戦を求め、11月11日に休戦条約に調印した。

この日、オーストリア・ハンガリーの皇帝は位を退いて皇后と共にスイスに逃れ、翌12日にドイ  
ツ皇帝カイゼル、ウィルヘルム2世も退位して一族と共にオランダに逃れた。

そこで、ドイツにおいては、社会民主党の首領エーベルトが内閣を組織して共和制を布くことに  
したが、すでに国内は全く疲弊して紛擾がやまなかつたので、何事もただ連合軍の指示するままに  
従うより外は無くなっていた。

## 講和条約の調印

ここにおいて、アメリカ合衆国の大統領ウィルソン以下、連合軍の講和  
委員はフランスのパリに会して平和条件を議した。わが国からは西園寺  
公望、牧野伸顕、駐英大使珍田捨巳、駐英大使松井慶四郎、駐伊大使伊  
集院彦吉が全権委員としてこれに臨み、イギリス、アメリカ合衆国、フラ  
ンス、イタリアの4国と共に5大国の一つとして重なる会議にあづかった。

翌大正8年（西暦1919年）5月、漸く講和条件ができたので、すなわ  
ちドイツの講和委員を招いてこれを示した。そして、12の修正を許した  
外は全部これを承認させて、翌6月28日、ヴェルサイユ宮殿の鏡の間で双方



西園寺公望

の調印を終えた。実に大正3年6月28日、オーストリア・ハンガリーの皇太子がサラエボで暗殺され  
た日からちょうど5年目の同月同日でした。

こうして5年の大戦はここに全く終わりを告げて、世界の平和は克復したのです。

## 我が国の得た利権

この条約によってドイツは地をフランス、ベルギーその他に割き、巨額の賠償金を連合軍に支払い、  
植民地全部を国際監理に移すことを約した。わが国は、膠州湾およびドイツが山東省で得ていた一切  
の権利を継承し、又、わが海軍が占領した旧ドイツ領の南洋諸島を統治する委任を受けるに至った。実  
にわが国は、この大戦への参加によって、一躍世界の5大国の一つとなり、ヨーロッパの政治問題にも参  
与するほどに国際的地位を高めたのです。

ついで、オーストリアとの講和条約もまたできたが、同国はすでに4国に分裂していて、戦前の地

## 第19話 第一次世界大戦と我が国

位は全くこれを失<sup>うしな</sup>った。ブルガリア、トルコとの講和も相次<sup>あいつ</sup>いで成<sup>せいりつ</sup>立した。

### 国際聯盟の創設

なお、この講和にあたって、国際聯盟が創設された。これは今度の大战の惨禍に鑑<sup>さんか</sup>み、アメリカ合衆国の大統領ウイルソンが提<sup>てい</sup>唱<sup>しょう</sup>して、将来における戦争を永遠に防止し、人類の幸福を増進<sup>じんるい こうふく ぞうしん</sup>するために、各国が協力して世界の平和を完<sup>ま</sup>うすることをはかったもので、本部をスイスのジュネーブに置き、聯盟総会、聯盟理事会、聯盟事務局および国際仲裁裁判所がその執行機関となっている。又、ますます激しくなろうとしている労働者と資本家との関係を融和するために、国際聯盟の一部として国際労働協約をも結んだ。そしてこのためには国際労働事務局を聯盟本部の所在地におき、労働問題の国際的調節をはかることにした。

### 米国の不参加

この国際聯盟には、先づ連合<sup>さんどう</sup>国が賛同し、後に他の文明国も殆どみな加盟したが、提唱者ウイルソンの国であるアメリカ合衆国は、これの反対党と上院とが、折角かれが苦勞してまとめ上げたヴェルサイユ条約を否決<sup>ひけつ</sup>して、別にドイツと講和条約を結んだので、その結果として、ヴェルサイユ条約の一部となっている国際聯盟には加入しないことになった。可笑<sup>おか</sup>しな成<sup>な</sup>り行<sup>ゆ</sup>きでした。

それはともかく、この国際聯盟の趣意とするところはすこぶる結構ですが、実際の世の中の事は、とかく理想通りに行かないことが多いので、この聯盟に在っても、その後、しばしばいろいろな問題が起こって、常に紛糾<sup>つね ふんきゆう</sup>が絶えずにいました。

( 第19話 第1次世界大戦と我が国 終わり。次は前頁に戻り、  
第20話 尼港事件と日露国交の回復 )